

半 丈 記

永井 規男

目につけば買う本に、真贋ものと鉄道紀行ものとがある。今の世の中、真贋の区別も付け難いもので満ちていて、真贋どうでもよいではないかという議論もでてきそうだが、やはり本物でなくてはね、という声もあちこちで耳にすることも多い。美術畑では真贋の鑑定に学者生命がかかることがあり、自分は建築畑にいて助かったねと思うことしきりである。絵画や彫刻と違って、柄はでかくて人目にさらしながら造られる建築物に贋物作りなどできようわけはないのだから。おまけに贋物をつくったところで儲かることもまずないのだし、と思っていると、すこし以前におこなわれたユネスコの古建築修理・保存に関わる会議で、文化財の古建築修理において部材の一部を新材に取り替える日本式の修理の仕方が批判されたことがあった。そのようにして修理された建築にオーセンティシティ（真正さ）は認められないというのである。この議論は、石の建築と木の建築の二つの世界における世界観の違いということで、日本式修理の仕方も理解されたのだが、修理を繰り返していると極端な場合には建立当初の材料が全くなってしまうこともありうるので、そうなったとき文化財としての真贋性が問われるのは確かである。いまの金閣は焼けて再建したものだから、文化財の指定はされていない。けれどもつめかける観光客は真贋性など気にかけることなしに義満が建てたものとして見ているようである。そんなこんなで建築物における真贋性の問題も実は微妙なところがあるのだが、権威のある美術館が騙されて贋物を買わされていたといった類の話の方がずっと面白いから、自分の畑のことは棚にあげて野次馬根性で楽しんでいる。

鉄道紀行ものは、これはまったく無責任に楽しめるものとして読む。若いころに内田百閒の阿呆列車ものを讀んだことからはじまってずっと続いている。鉄道そのものが減り、ローカル線の各駅停車でのんびり旅をするなんてことができなくなってきたぶん、余計にそんな旅にあこがれて、できない代償としてそういう旅行記を探すことになるようだ。書店には旅行記類が結構沢山ならんでいるが、なにやら胡散臭いものがある、真贋でいうと贋物くさいものが多いと寂しい。贋物の最大の特徴は香りがなく、ということだと思ふのだが、流石に百閒のものには香りがあった。いまは香りなど全く感じさせないものが幅をきかせている。近頃讀んだものの中ではビル・ブライソンの「イギリス見て歩き」が面白かった。アメリカ人の新聞記者である彼が、列車でイギリス中を旅する話で、*原題の <小さな島での覚書> のとおり、行く先々で見聞したというより、出会った人たちの人間観察を諧謔をこめて書いたものだ。勿論、車中での出来ごとともいろいろあって、鉄道旅行好きには共感するところが多い。列車の旅のよさは車中の人々を観察できるところにあり、結局それが旅の記憶としてのちのち残ることになるのだが、新幹線などは一斉に前を向かされて面白くもなんともない。旅もなにやら贋物めいたものばかりになってきたようだ。